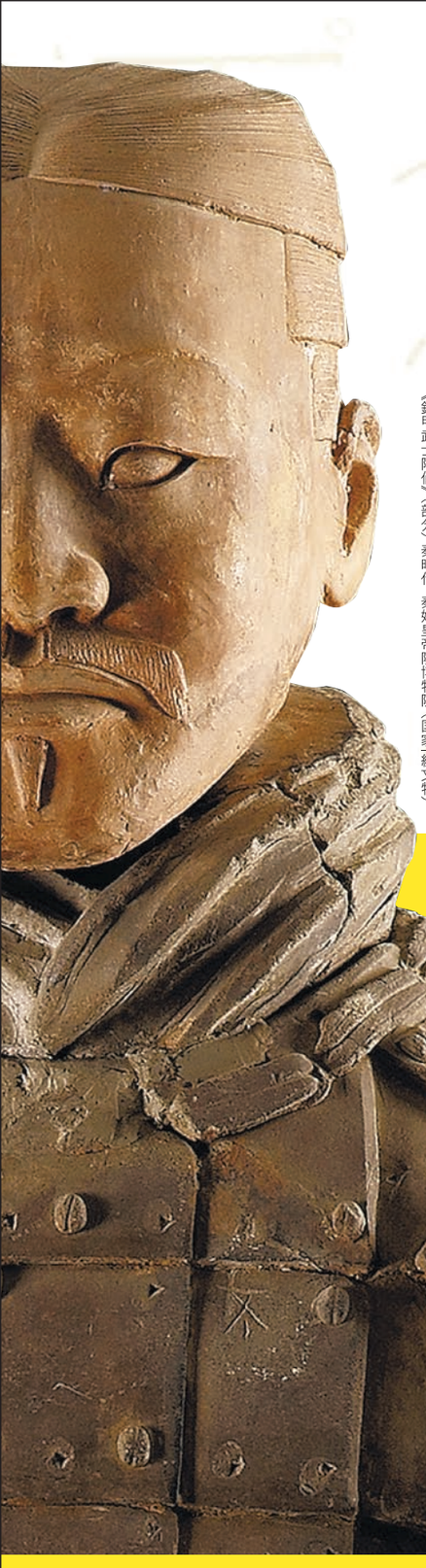


世界初公開※
文字の刻まれた兵馬俑

《鎧甲武士陶俑》（部分）秦時代 秦始皇帝陵博物院（国家一級文物）

漢字の世界、その歴史と魅力を知る

日中国交正常化45周年記念特別展

Chinese Characters: A Legacy and Marvel Perfected Over Three Millennia

漢字三千年

―漢字の歴史と美―

本展では文字の刻まれた兵馬俑など注目を集める史料が多数出品されます。
中国古代史研究者の鶴間和幸学習院大教授に、「漢字三千年展に見る始皇帝の時代」と題して本展の見どころを紹介いただきました。

漢字三千年展に見る始皇帝の時代

鶴間 和幸
学習院大教授

1950年東京都生まれ、80年東京大大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。専攻は中国古代史、博士（文学）。96年より現職。近著に「人間・始皇帝」（岩波新書、2015年）など。

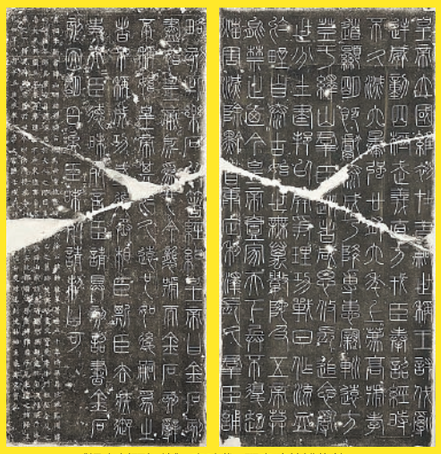
新史料の発見と始皇帝の評価

2200年前、中国を初めて統一した秦の始皇帝への関心はやむことがない。1974年に兵馬俑が発見され、翌年に湖北省で竹簡史料が出土して以来、地中から同時代の文字史料が続々と出現している。始皇帝の政治を支えていた地方官吏が残したものだ。司馬遷の『史記』は前漢の武帝晩年に編纂されたので、その中の秦始皇本紀は漢代の人々による後世の史料である。

漢代の人々が100年前の始皇帝を見る目と、秦代の官吏が始皇帝を見る目には当然違いがある。前者は漢王朝の立場で歴史的な評価を下す。歴史的な人物の評価には、見る者の時代の立場が入り込む。長城建設など民衆を酷使しての大規模事業や焚書坑儒という思想弾圧から暴君と見るか、中国を最初に統一し、その後の統一王朝の基礎を作った有能な君主と見るか、後世の評価は大きく揺れ動く。秦代の人々が始皇帝をどのように見ていたのかという問いは、後世の歴史的評価が下される前の始皇帝像に立ち返るものである。

展示された史料を読む

漢字三千年展で展示された史料から秦代における始皇帝像を探る。始皇帝の生存した時代には単に「皇帝」といい、正式に始皇帝というのは二世皇帝のときから。始皇帝嬴政（えいせい）の在位は37年間。13歳で即位し、統一までの26年間は王（秦王）で、統一してから亡くなるまでの12年間は皇帝であった。



《嶧山刻石拓片》秦時代 西安碑林博物館

嶧山刻石の拓本

小篆（しょうてん）文字の史料からは始皇帝の人間像を読み取ることができる。「皇帝」（始皇帝）ではじまる前段部分は始皇帝の同時代の史料であり、裏面1行目の下の「皇帝」（二世皇帝）ではじまる後段部分は次の二世皇帝始皇帝は儒家と正面から敵対していなかった。始皇帝はその後すぐ訪れる泰山で封禅の祭祀（天地を祀り、統一を報告する）を行うためにも、それを熟知していた儒家の人々に頼ろうとした。刻石の中に「孝道は顕明なり」や「今皇帝は天下を壱家とす」とあるように、始皇帝は父に対する孝行や家の秩序にこだわっていた。始皇帝の臣下は彼の行動を詩にして高らかに詠み上げたほどだ。近年の出土史料から分かったように、秦では親不孝は棄市（市場でさらし首の死刑）とされるほど、家の秩序にこだわっていた。始皇帝も王の時代に反乱に加担した母を幽閉した際、不孝とされることを恐れて、母を宮殿に戻したほどである。

刻石の最後の部分に二世皇帝の詔書の文章が追加されている。末子として可愛がられた二世皇帝胡亥は、父の事業をただ単に皇帝の所為と記録すると、後世どの皇帝であるのかわからなくなってしまうといい、「始皇帝」という称号をわざわざ石に刻んだ。

2009年に北京大学に寄贈された前漢武帝期の竹簡に『趙正書』と題するものがあった。始皇帝を皇帝と認めず、秦王趙正と表記し、その死から二世皇帝の時代を描いた物語である。『史記』の内容と大きく違うのは、胡亥が始皇帝臨終の際に正式に認められた後継者であったこと。『史記』では長男の扶蘇を後継にする遺詔を出したが、李斯、趙高らに破棄され、偽詔によって胡亥が即位する。胡亥が兄弟姉妹を惨殺し、扶蘇、蒙恬らを自殺に追い込むことは共通している。『史記』や『趙正書』は始皇帝や胡亥に歴史的評価を下した史料である。

兵士俑の文字

兵士俑に刻まれた篆書の「不」の一字からは、始皇帝へのさまざまな思いが広がってくる。始皇帝陵の東にある兵馬俑坑には8千点もの兵士と馬の俑が地中に埋まっている。兵馬俑は一般には文字史料ではなく、考古資料である。しかし文字の刻まれた兵馬俑は、わずか一字でも文字史料としての価値がある。不という名の人物は兵馬俑を制作した工匠。兵馬俑が始皇帝の在世中に作られたのか、死後に作られたのかは両説ある。在世中であれば、始皇帝に仕えた兵士の姿を再現したものであり、死後であれば始皇帝の死を悼んで作ったものになる。不の字は兵士の鎧の正面に堂々と刻まれているが、ほかに兵士の腰、胸、首、肩、背、足、衣服の裾、足の踏み板などにも見られる。工匠の名は越、已、其、屈、甲、辰、申、田、山、高、年、午、丙、得など計80件ほど見られ、姓は省かれ名だけが示される。皇帝に対して姓を出すことは慎まれたためだ。丞相・李斯も正式の文書では「臣斯」と称した。

不の字は兵馬俑一号坑では全部で7件見られ、一人で複数の製作に関わったことがわかる。得という人物は21件も見られ、なかに宮得とあり、宮殿の瓦を製作する官に所属した工匠であることがわかる。また始皇帝陵の西にある建設工人の集団墓地には、瓦に簡単な経歴が刻まれていて「贛榆得」とあるのを見れば、得の出身地は琅邪郡の贛榆県であったことになる。工匠は東方の地の罪刑者も駆り出されていた。つまり製作者は秦の人ではなく始皇帝に征服された東方の人が多かったことになる。彼らが強制的に兵馬俑を作らされた。始皇帝の軍隊に故郷を奪われた「不」は始皇帝に対してどのような思いを持って、その兵士の姿を粘土で焼いたのだろうか。

《里耶秦簡―校券》秦時代 湖南省文物考古研究所（国家一級文物）

古井戸から発見された2枚の行政文書

里耶秦簡は湖南省の里耶故城の古井戸で偶然発見された秦の時代の行政文書である竹簡・木簡と木牘（もくとく）（幅広い木板）である。こちらは始皇帝の時代の地方官吏が残したものである。同じように「三十年」、「三十一年」とあるのは始皇帝30年（前217）、同31年（前216）のことである。実に生々しく始皇帝の時代の空気を感ずる。

『史記』秦始皇本紀によれば、同31年12月に月の名称を嘉平というめでたい名称に改めたのをきっかけに、村落ごとに民に6石の精米した穀物と2頭の羊を下賜して祭祀させている。木簡では同31年正月（秦では10月の冬が年頭であり、12月の次は正月）に穀物蔵から穀物を放出していることが書かれている。倉庫の管理人、書記、支給官吏の名が列挙される。彼らは都の咸陽から遠く離れた洞庭郡遷陵県の地で中央の命令を忠実に実行していた。『史記』の記事と出土史料とが符合するとおもしろい。『史記』には後世の故事だけではなく、秦の同時代の史料も収められているので、出土史料との照合が必要である。

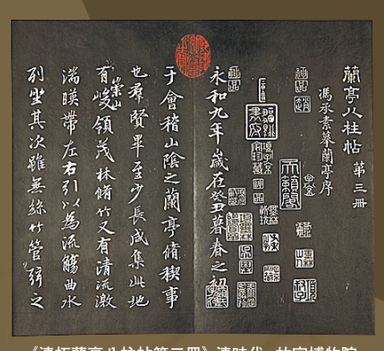
このように始皇帝の同時代史料と後世の史料とを照合しながら、始皇帝像の見直しが続く。漢字の一字一字にこめられた古代のメッセージを読み取る作業こそ、歴史学のおもしろさといえよう。

《里耶秦簡―木牘》秦時代 湖南省文物考古研究所（国家一級文物）

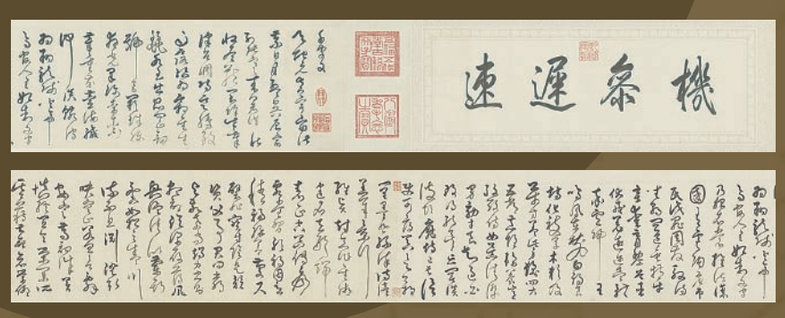
歴史とともにあゆむ“漢字”

《“歳于中丁”牛胛骨卜辞》商時代
安陽博物館（国家一級文物）

《“一升”“君幸酒”雲紋漆耳盃》前漢時代
湖南省博物館



《清拓蘭亭八柱帖第三冊》清時代 故宮博物院



弘歴（乾隆）《草書臨蘇軾千字文巻》清時代
故宮博物院

《光緒款御制詩磁薑碗》清・光緒年間
故宮博物院

《五十二病方》（部分）前漢時代
湖南省博物館（国家一級文物）

2017.3.24（金）〜4.21（金）

京都市美術館別館

開館時間＝9時〜17時（入館は閉館の30分前まで）　休館日＝月曜日

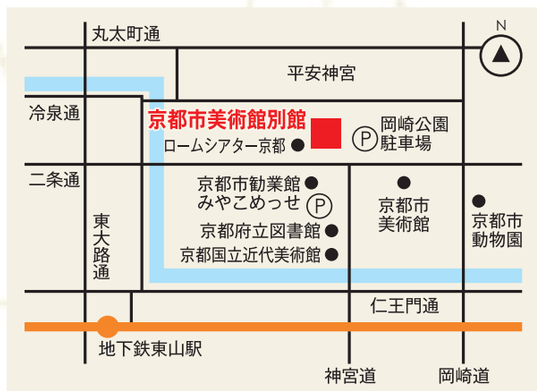
観 覧 料＝一般 1,300（1,000）円／高大生 1,000（800）円／小中生 500（300）円

※（ ）内は団体料金　※団体は20名以上　※障害者手帳をご提示の方と介助の方1名は無料

京都市左京区岡崎最勝寺町13番地（ロームシアター京都の北側）

お問い合わせ　03-5696-7808（展覧会事務局）　特設サイト　kanji3000.jp/

主催＝中国文物交流中心、中国人民対外友好協会、日本中国文化交流協会、京都市、京都新聞
後援＝外務省、文化庁、中国国家文物局、中国大使館、中国駐大阪総領事館、読売新聞社、日本書芸院、中友国際芸術交流院、中国文化センター、日中協会、人民日報海外版日本月刊
協力＝山九、華僑国際、中国国際航空、藤井寺市教育委員会、デザインアーク　協賛＝交通銀行東京支店、漢検 漢字博物館・図書館、伸和工業、住友商事　企画＝黄山美術社



[交通案内]
◎地下鉄東西線「東山駅」……1番出口より徒歩約10分
◎市バス……「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車

[関連記念講演会]

※別会場で開催します。別途会場の入館料が必要。詳細は特設サイトまで。

◉時間：各回とも午後2時〜3時30分　◉会場：1 2 4は漢検 漢字博物館・図書館 多目的ホール　3は泉屋博古館　◉定員：各回先着順、1 2 4は120名、3は100名。

1 「電子時代の漢字研究」3月25日(土)
講師：阿辻 哲次氏
（京都大大学院教授、本展監修者）

2 「北京の暮らしで出会った漢字」4月1日(土)
講師：加藤 千洋氏
（同志社大大学院グローバル・スタディーズ研究科教授）

3 「青銅器にあらわれた文字」4月9日(日)
講師：廣川 守氏
（泉屋博古館副館長）

4 「書という芸術」4月15日(土)
講師：中村 伸夫氏
（筑波大教授・日本書芸院常務理事）

※漢字三千年展で初めて一般公開されます。

広 告